広島県立保健福祉短大紀要　1 (1) 51 - 58　1995

看護教育課程における英語教育の在り方

本　岡　直　子*1　川　崎　裕　美*1

The role of English education in the nursing curriculum

Naoko MOTOOKA, Hiromi KAWASAKI

Abstract

The purpose of this study is to examine the present situation of English education in nursing education in Japan, and to consider the role of English education in the curriculum. In order to make an effective nursing curriculum, general education, including language learning, shoud not be ignored, and what should be taught must be considered carefully.

In this paper, the survey shows the difference in the importance placed on language education between the students and the teachers in our nursing department. The desires of the students who just entered our junior college and those of the teachers in the nursing department were compared. As a result, we found that the teachers think that students should study English only for general refinement or as a part of their professional education. On the contrary, the students want to improve their communication abilities. We concluded that the students' consciousness is mainly on the spoken language, and the teachers' consciousness is mainly on the written language.

As a conclusion, it is recommended that ESP (English for Specific Purposes), which the students are not interested in now, must be included in English education in the nursing curriculum. The needs of the students and those of others are not the same, but both needs should be taken into consideration in designing the course and in designing the content of language education.

Key Words：ESP (English for Specific Purposes), needs analysis, nursing education, English education, curriculum
特定目的のための英語，看護教育，英語教育，カリキュラム，シラバス作成

はじめに

大学教育における一般教育での英語の存在は，非常に曖昧であるといえる。中学校や高等学校における英語教育ではそれぞれ学習指導要領に，1）外国語を理解し，外国語で表現する基礎的な能力を養う，2）外国語で積極的にコミュニケーションをはかろうとする態度を育てる，3）言語や文化に対する関心を深め，国際理解の基礎を培う，という3点の目的が明確に示されている。加えて，受験という，英語学習に対する動機も明確に存在する学習者も多い。しかしながら，大学における英語教育では，受験という動機付け，及び目的が消滅してしまっている。また，明文化された目的も特に存在しない。基準として明文化されたものに，大学設置基準があるが，1991（平成3）年度に大綱化が行われている。従前の設置基準には，大学の外国語設置に際していくつかの基準が示されていた。たとえば，4年制大学では1外国語を必修で2年間に渡り，8単位を課するものとする，などである。また，大学基準協会では，向上基準を2言語16単位以上として加盟大学に要求してきたが，今回の改正で，このような枠組みが取り除かれた。つまり，各大学は，思うようにカリキュラムをつくってよいということであるが，言い換えれば，各大学が，何のために外国語を学ぶのか，その目的について自ら考え決めることが必要となったということである。

しかしながら，看護教育課程における外国語教育の役割についてはこれまであまり検討され

＊1　看護学科
Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

ていない。看護教育は，様々な教育機関で，様々な教育課程によって行われており，その内容は専門科目と基礎科目に分けられている。英語も，外国語として基礎科目に含まれ，異文化やコミュニケーションを理解する役割を担っている。しかし，臨床実習で専門用語として英語に出会うとき，学生の戸惑いは大きく，患者の正確な状態把握の障害となっていることは否定できない。公用語として英語は，国際学会での発表や講演，専門図書での最新知識・技術の習得に不可欠となっており，卒業後の学習においても英語の重要性は増大しているにもかかわらず，生涯学習の手段としての英語を学習する機会はほとんどない。専門用語としての英語への戸惑いは専門職としての卒業後の学習をせばめる可能性が高く，看護教育においても異文化やコミュニケーションを理解する基礎英語とともに専門科目としての英語を学習しておく必要性があると考えられる。

そこで本研究では，これまであまり注目されていない看護教育課程における外国語教育の役割に着目し，看護系大学，及び看護系短期大学における英語教育の在り方について検討を行う。本論文においては特に学生の高等学校以降の英語学習に対する意識，及び看護系教員の意識を調査し，今後，看護教育カリキュラムにおける英語教育の特徴を明確化していくことにつなげる。

course design

1．設置基準について

本学看護学科のカリキュラム構築の際には，必須条件として，『短期大学設置基準』ならびに，『保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則第七条３項の教育内容を示す別表三』の要件を満たすことが求められている。

大綱化前の『短期大学設置基準』においては，授業科目について，一般教育科目，外国語科目，保健体育科目及び専門教育科目に区分し，それぞれ開設が義務づけられていた。しかしながら，外国語に関する科目の履修に関しては，『大学設置基準』と比較してより弾力化されており，卒業要件単位数として義務づけられていなかった。しかし実際のところ，大綱化前は多くの大学において，英語はほとんど必修とされていた。大綱化後は様々な履修方法を採り，選択にする大学が増えている。

また，『保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則第七条３項の教育内容を示す別表三』については，国立大学医療技術短期大学部看護学科協議会・看護協会検討委員会（1995）[1]に述べられているように，看護教育カリキュラムの構築，改善にはこの指定規則自体が必要でないという意見もあり，『設置基準』同様，将来見直しが求められるであろう。

2．看護教育の専門化

日本の看護学の専門的な発展は，現在，看護大学の増加にもあらわれている。1991(平成３）年に11校だった看護大学は，1993（平成５）年には19校に，そして1995（平成７）年には30校にまで増加している。このように，看護教育が専門化していくに従って，そのカリキュラムもまた，それに併せて検討していく必要がある。

平山は，大学基準協会の示した『大学基準（1994年２月改定)』の趣旨に沿った『看護学教育に関する基準（1994年７月)』の内容を紹介している[2]。それによると，目的及び到達目標の明示が重要であり，当該大学の教育を方向づける考え方を確認して，それに沿って課程を編成する必要がある，そして授業科目は体系的に設定すること，が説明されている。

英語を含めた外国語のカリキュラムの編成に当たっては，大学英語教育学会が1992年７月に発表した『大学設置基準改正に伴う外国語（英語）教育改善のための手引き（１）-JACETハンドブック』と大学基準協会が1951年９月に発表した一般教育と専門教育の配分方法等（図１）のような例があるが，大綱化により，さらにいろいろな配分方法が考えられ得るようになった。

3．本学看護学科におけるcourse design

本学看護学科における外国語教育のカリキュラムについてみると，外国語科目として以下の科目が開設してある。

英 語 I　１年次通年必修（２単位）
英 語 II　２年次通年選択（２単位）＊
ドイツ語　１年次通年選択（２単位）＊
＊英語II又はドイツ語のどちらか２単位を選択必修

それに加えて，専門科目の中に外書講読（３年次通年選択２単位)という科目が開設してある。

本学看護学科の目的が，看護のスペシャリスト養成という目的を担っている以上，そこにおける英語教育もある程度必然的にESP（English for Specific Purposes）を意識する必要があると考えられる。１年次の英語Ｉにおいては，教養・基礎科目の中に設置してあることもあり，また，高等学校卒業後すぐという意味で，いわゆる大学での一般教育における英語，言い換えれば，ESPに対するGeneral English（すべての英語学習者を対象とした英語）を学ぶことを目的としている。英語Ｉの概要は「高等学校で学んだ基本的事項を確認しながら，さらに高度な様々な教材を用いて英米の文化に触れるととも

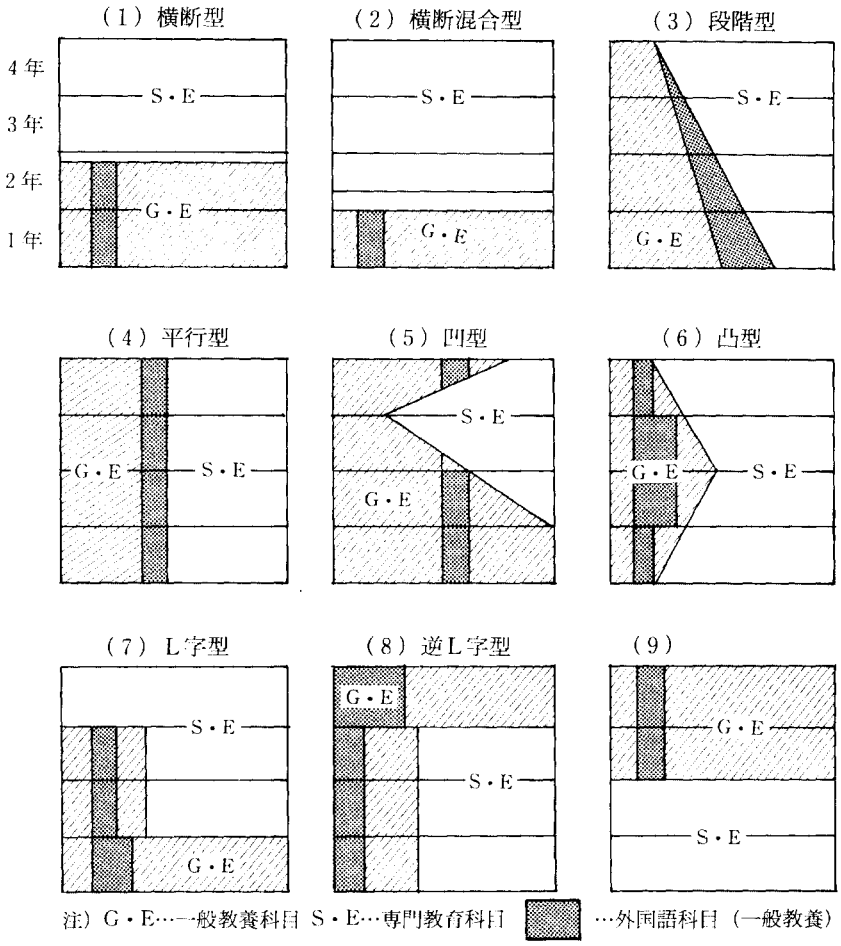

図1　一般教育科目と専門教育科目の配分方法（大学英語教育学会：1992）

に，まとまりのある文章の概念や要点をできるだけ速く，多く読みとるという高度な読解力を養い，目的に応じた読みを可能にすることを目的とする。また，聴解力及び伝えようとすることを確実に伝える表現力の向上にも努める。視聴覚教材を利用することにより，生きた英語を学び，言語を実際に運用する能力を養う。」と設定している。このように英語Ⅰにおいては英語の一般的な能力の向上をめざすが，英語Ⅱを履修した学生に対しては，ESPの観点から英語能力の向上をめざす。すなわち，医療のスペシャリストとしての道を進んだ場合，より役に立つ英語の能力の向上である。さらに，3年次において外書講読を履修した学生は，外国における医療の知識を直接外国語を通して得ることができるという教育課程である。

ESP (English for Specific Purposes) について

大学における英語教育において，中学校や高等学校と大きく異なる点は，専門教育を行う上に必要な外国語能力の養成であるといえる。つまり，これはESPであるといえる。ESPとは，安藤によると,「学習者がその専攻する学問や将来従事する職業において必要とする種類の英語，及びその学習に関することがらを指す総称である」と定義づけられている[3]。English for Special Purposesともいう。ESPの概念自体は，さらに下位区分され，EAP (English for Academic Purposes) とEOP (English for Occupational Purposes) となる。医療といった，特定の職種に従事する場合に要求されるコミュニケーション能力を中心に考える場合はEOPとなる。EAPは，各専門分野の学問研究を行うのに必要な種類の英語であり，そのどちらを選ぶかによって，要求されるlanguage skillの重要性に差が生じる。医療に従事する人が，英語を話す患者と接する際のような実際の活動と直結したものを考えた場合はEOPとなり，今後は，このようなEOPに加えて，EAPの中心的領域として位置づけられ，現在，その重要性に注目されているEST (English for Science and Technology) が必要となると考えられている。現在，世界中の多くの論文が英語で書かれている状況を鑑みると，知識・情報を得る目的のESTをも視野に入れていく必要もあるものと思われる。

ESPの教育課程としての特徴は，以下のよう

にまとめられる。

（1）シラバスが限定されている。つまり，読む，書く，聞く，はなす，という4技能の中で，1つ又は，2つの技能にのみ焦点を当てたシラバスを考えればよいということである。また，活動としても，口頭発表であるとか，会話技術とか，ある特定の活動にあわせた技能の養成のためのシラバスが必要である。そして場面も特定のトピック，又は状況に合わせたシラバスにおいての英語能力養成がはかられる。

（2）（1）のようなシラバスをつくるために，どのような英語能力が必要とされているかというneeds analysisを行い，その上で適切な限定がなされていることが必要である。このneeds analysisは，perception, principle, practiceの3点から行われるべきである。つまり，誰の必要性か，関連した内容として，どのような内容を含んでいるか，さらには，どのようにしてそのneeds analysisが行われているか，ということである。また，TSA（Target Situation Analysis）および，PSA（Present Situation Analysis）を行うことも必要とされる。needs analysisを行うということは，言い換えればESPがgoal orientedのコースであるためといえるであろう。どのようなgoalをめざすので，どのようなneedsがあるかということを分析する必要があるのである。

（3）関連した特定の分野の専門家との協力が必要となる。つまり，医学英語を教えようとすれば，医学関係の専門家との協議が必要となることは否定できない。そのコースを始める前の打ち合わせとか，さらにはteam teachingなども必要となるであろう。

そのほか，ESPがEFL(English as a Foreign Language) 又はESL (English as a Second Language)のクラスと異なる点は，動機付けがなされている，クラスが同じ分野をめざしているという意味で等質であるということ，さらには，多くの場合，学生が大人であるという特徴などがある。

Hutchinsonは，ESPに影響を与える要因を以下のように図示している[4]。この図に示されているように，ESPは学習者のneedsにあわせるようにつくられたコースに基づくものであり，needs analysisに基づいたシラバスを，的確な方法を用いて行うために，needs analysisをおこなうことが，ESPのcourse designでは必要不可欠である。

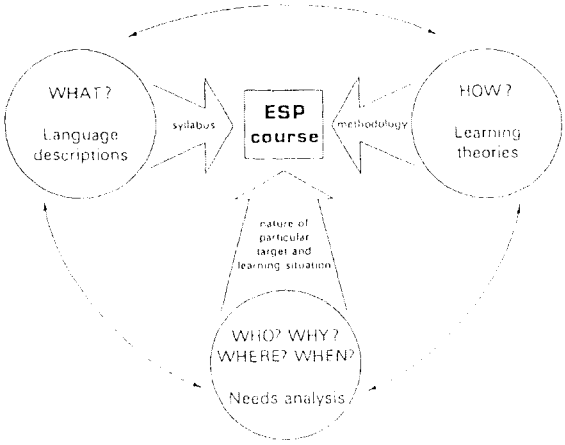

図2　ESP course designに影響を与える要因
(Hutchinson：1987)

本学におけるneeds analysis
―英語に対する認識の比較―

看護学教育課程に適した英語教育のcourse designのため，needs analysisを行った。needs analysisの実施方法としては，アンケート，インタビュー，観察，ケーススタディー，テストなど様々な方法があるが，今回は，本学におけるneeds analysisを，学生，及び教員を対象にアンケートを行い，分析した。

1．アンケート対象者

1年生100名（うち回答率99%）
看護学科教員17名（うち回答率88%）

2．調査方法

学生に対しては，1995年5月初旬の授業時間に，アンケート用紙を配布し，その場で記載させた。(資料1)教員に対しては，1995年10月初旬に行った。アンケートは，職業上の英語の必要性，その具体的な技能，今後の英語学習のあり方等に対する意識について質問した。(資料2)

3．結果

その結果を分析すると，以下の通りである。

3-1．英語の必要性に対する意識

本学看護学科の教員及び学生の英語の必要性にたいする意識は以下の通りである。(図3)
漠然とした必要性は認識していると判断できるものの，教員に比べて，学生の方の必要性に対する意識はやや低い。

資料 1

学籍番号　　氏名

次の質問に答えてください。

1.将来、自分が従事しようとしている職業分野で、英語がどれくらい必要だと思いますか。

5	4	3	2	1
非常に必要	ある程度必要	どちらとも言えない	あまり必要でない	まったく必要でない

2.1の回答に対する理由を述べてください。
（必要と答えた場合には、どのようなときに必要か、具体的場面を想定して述べてください。）

3.どのような技能が必要だと思いますか。

	非常に必要	ある程度必要	どちらとも言えない	あまり必要でない	全く必要ない
英語を読む	5	4	3	2	1
英語を書く	5	4	3	2	1
英語を聞く	5	4	3	2	1
英語を話す	5	4	3	2	1

4.あなたの身の回りに、医療に従事していらっしゃる方がいらっしゃいますか。

YES　　NO

5.1）自分の従事しようとしている職業がどのようなものか具体的にイメージできますか。

5	4	3	2	1
イメージできる	だいたいイメージできる	どちらとも言えない	あまりイメージできない	全くイメージできない

2）イメージを箇条書にしてください。

6.これまでに辞書をつかったことがありますか。
（中学・高校両方で使用したことがある場合は両方に印をつけてください。）
（　）中学校のときある。（頻度：　　）
（　）高等学校のときある。（頻度：　　）
（　）全く使用したことがない。

7.これまでの英語の勉強はどこに重点が置かれていましたか。

（　）読む
（　）書く
（　）聞く
（　）話す
（　）その他（具体的に：

8.大学では何に重点を置いて、勉強すべきだと思いますか。

	非常に必要	ある程度必要	どちらとも言えない	あまり必要でない	全く必要ない
英語を読む	5	4	3	2	1
英語を書く	5	4	3	2	1
英語を聞く	5	4	3	2	1
英語を話す	5	4	3	2	1

9.教養基礎英語の目的／目標はどのようなものであるべきだと思いますか。丸印をつけてください。（複数回答可）

（　）コミュニケーション能力
（　）国際人養成
（　）教養
（　）専門の基礎
（　）諸外国の文化・事情理解
（　）その他（具体的に：

資料 2

アンケートへご協力ください。

1　看護の分野で、英語がどれくらい必要だと思われますか。

5	4	3	2	1
非常に必要	ある程度必要	どちらともいえない	あまり必要でない	まったく必要でない

また、それぞれの専門分野に、どれくらい必要だと思われますか。

	非常に必要	ある程度必要	どちらともいえない	あまり必要でない	まったく必要でない
a.看護管理	5	4	3	2	1
b.助産婦	5	4	3	2	1
c.保健師	5	4	3	2	1
d.看護教諭	5	4	3	2	1
e.教員（専門学校）	5	4	3	2	1
f.教員（短大大学）	5	4	3	2	1

2.　本学学生に、上のa～fのうち、どれについてもらいたいと思っていますか。2つ選んでください。
（　　）（　　）

3.　看護の分野では、どのような技能が必要だと思いますか。

	非常に必要	ある程度必要	どちらとも言えない	あまり必要でない	全く必要ない
英語を読む	5	4	3	2	1
英語を書く	5	4	3	2	1
英語を聞く	5	4	3	2	1
英語を話す	5	4	3	2	1

4.　本学学生に何に重点を置いて、勉強すべきだと思いますか。

	非常に必要	ある程度必要	どちらとも言えない	あまり必要でない	全く必要ない
英語を読む	5	4	3	2	1
英語を書く	5	4	3	2	1
英語を聞く	5	4	3	2	1
英語を話す	5	4	3	2	1

5.　教養基礎英語の目的／目標はどのようなものであるべきだと思いますか。丸印をつけてください。（複数回答可）

（　）コミュニケーション能力
（　）国際人養成
（　）教養
（　）専門の基礎
（　）諸外国の文化・事情理解
（　）その他（具体的に：

6.　そのほか、なにかコメント、アドバイス等がありましたら、お書きください。

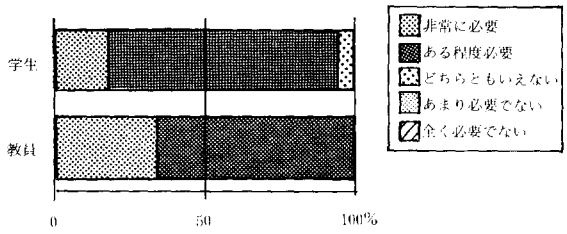

図3　看護の分野で英語はどれくらい必要か

3-2．看護の分野で必要な技能

「それぞれの専門別にどれくらい必要だと思われますか。」という教員対象の質問項目については，臨床勤務の看護婦，助産婦，保健婦，養護教諭に対しては，必要とは感じているがその程度は“非常に”とまでいかず，“ある程度”必要と思っている場合がほとんどである。だが，看護教育に従事する者に対しては，その勤務先が専門学校，短期大学，大学を問わず，英語が必要だと思う割合は非常に高くなり，特に短期大学又は大学で教育に従事する者にとって英語が必要だと思っている教員は全員であった。

また，「看護の分野では，どのような技能が必要だと思いますか。」という質問項目に対する回答を，教員の回答と学生の回答を比較してみた。図4-1と図4-2を比較すると，教員側が，読む，書くといういわゆるwritten languageに重点を置いているのに対して，学生側は，話す，聞くというspoken languageのコミュニケーション能力に重点を置いていることがわかる。（図4-1，図4-2）

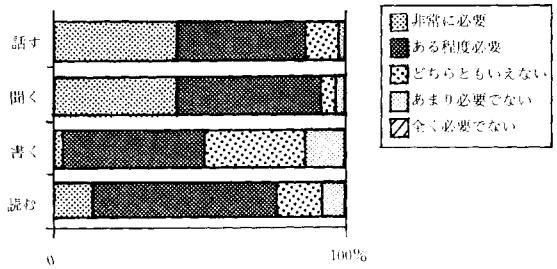

図4-1　どのような技能が必要か（学生）

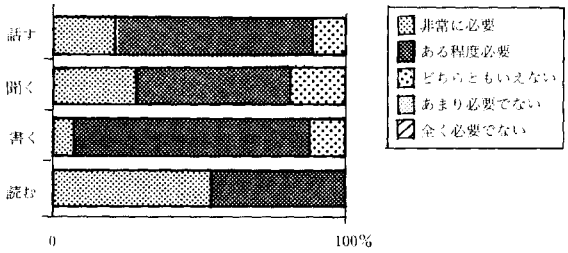

図4-2　どのような技能が必要か（教員）

3-3．大学で学習すべき技能

「大学では，何に重点を置いて勉強すべきだと思いますか。」という項目に対する回答は以下の通りである。（図5-1，図5-2）

この項目に関しても，看護の分野で必要な技能に関する回答と同様，学生側はspoken languageに関して，教員側はwritten languageに関して偏りがあることがわかる。

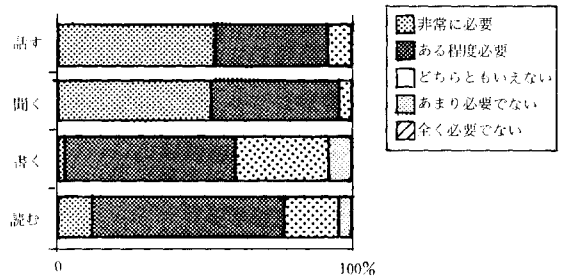

図5-1　何に重点を置くべきか（学生）

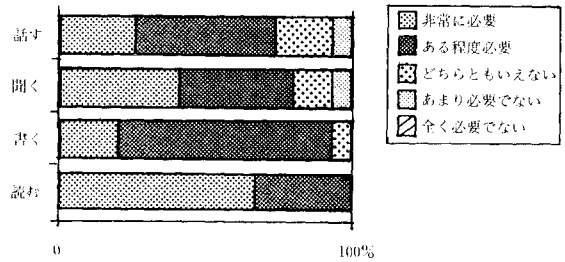

図5-2　何に重点を置くべきか（教員）

3-4．教養・基礎英語の目的・目標

「教養・基礎英語の目的・目標はどのようなものであるべきだと思いますか。（複数回答可）」この質問に対する回答は以下の通りである。（図6-1）

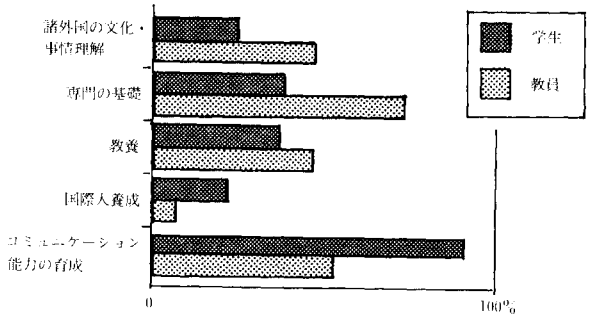

図6-1　英話学習の目的・目標（本学）

この質問に対しても，教員と学生とでは大きな違いが現れている。教員側は，教養基礎英語の目的は専門の基礎であるべきだと思っている人が大半であるのに対して，学生側にはあまりその認識はなく，むしろコミュニケーション能力の育成という一般的な目標であるべきだと思っているのである。これは学生側は，ESPよりもむしろEGPをのぞんでいるということをあら

わしているともいえるし，また，学生は，まだ専門教育が始まったばかりなので，専門教育と英語の関連が全くとらえられていないため，このような結果がでたものとも考えられる。

3－5．その他

そのほか，教養・基礎科目としての英語教育に対してコメント，アドバイス等求めたところ，教員側から以下のような意見が寄せられている。

・「英語の勉強から，継続する力，どこでも機会をつくり学習する姿勢を身につけさせて欲しい。」「実用的なことは，自然と身につくと思われるが，"英語でわかれば楽しさが増す"という実感を早い時期に知るとよい。」というような，語学学習に対する姿勢に対するもの。

・「"看護学生"にとらわれることなく，広い分野での英語を解するコミュニケーション能力（ふつうの感覚で会話，電話の応対，手紙のやりとりetc.）を身につけて欲しい。」「外国人の入院が増加するのでその対応ができる能力があればよいと思う。」「臨床では，主にカルテの読解や，外国人の患者さんとの会話で英語が必要だと思う。また，実際に看護を行う場合，対象者を理解するという点で諸外国の文化，風習を知るために英語力は必要だと思う。」という実用に関するコメント。

・さらには，「論文を読むことも必要なので今の学生の間に読解力をつけてもらいたいとは思うが，基礎能力からみてどこまでのばせるのかと考える。」「看護系の外国雑誌も多くはいっており，目に触れる習慣はつけさせたい。」「看護教育・研究では文章読解力が一番必要である。」といった，研究者の立場からの必要性の実感に基づいたコメント。

このような，特定の分野の専門家の意見は，英語教育のカリキュラム編成の際に考慮されなければならない。

考　察

看護の分野で必要と考える技能に関する回答については，学生自身の自分の将来に対するイメージにおうところが大きいと考えられる。看護職として病院に勤務することをイメージしている学生が多く（99名のうち自分のつこうしている職業がイメージできると回答した学生75名のうち39名が病院勤務としての看護職をイメージしている），また，英語が必要な具体的場面の記述においても，「日本語を母国語としない人の受診・入院」という回答をした学生が68名と最も多かった。そのため，コミュニケーションとして必要なspoken languageに関心が集まったものと考えられる。14名ではあるが，「参考文献

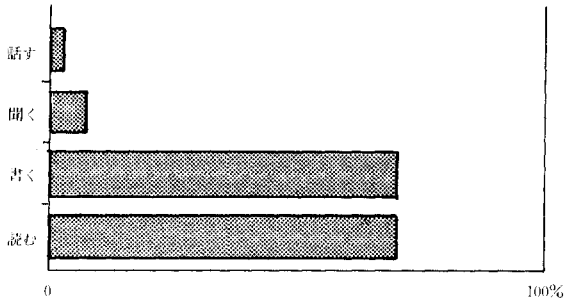

図7　これまではどこに重点が置かれていたか

や発表」のため必要と考えた学生もおり，これらの学生は，「読む」「聞く」技能が必要と回答していた。

大学で学習すべき技能に関しては，学生側は，spoken languageのコミュニケーション能力に重点をおいているが，これは中学校，高等学校での学習方法に寄るところが大きいと思われる。図7に示されているように，中学校，高等学校では読むことを中心にwritten languageとして学習してきているので，大学ではその反動として「話す，聞く」という事をやってみたいという願望も入っているものと思われる。

教養英語の目的及び目標に対する回答を，医療系大学とは限らない大学生全般，及びその教員との回答と比較してみると，図6－2が示すように，本学の結果とあまり変わっていない。

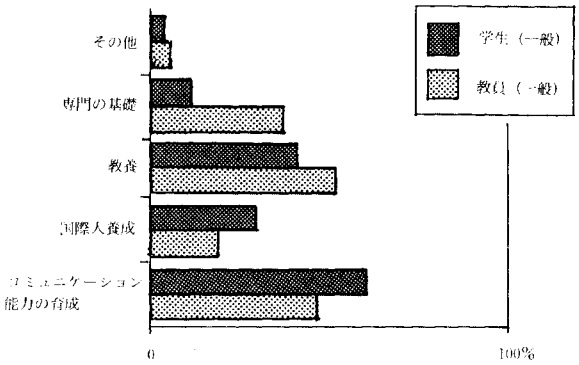

図6－2　英話学習の目的・目標（全般）

このことから，大学教員は，教養中心で，コミュニケーションはその次に考える傾向があるのに対して，学生はコミュニケーションを第1に考える傾向があることがわかる。また，専門分野からの要望としては，専門研究では諸文献を読む上で英語が必須であり，そのためどうしても外国語の技能としては，読む力が主として必要ということになるのであろう。

結　論

本学は，医療系短期大学であり，その目的として，医療技術者の養成ということが掲げられている。また，大学における英語教育では，中

学校や高等学校における英語教育の目的に，専門研究の基礎として役立つような外国語能力の養成という目的が加わるのは当然のことである。このため，ESPのシラバスに乗っ取った英語教育を行うことが必要であると考えられる。ESPがEFLと異なる点は，語彙の面での特異性，また教材がトピックにあったものであること，主に成人が対象の教育であること，そして何より，教師自身に，その分野に対する知識が必要であることということである。ESPを教える教員として，その分野を学ぶのにふさわしいテキストを選択すること，そのテキスト独自の複雑な言い回しや構文といった面を教えること，そのテキストに関連したテキストを教えることをしなければならない。

教員側の負担としては大きいが，ESPのよい点としては，needs analysisを行い，goalをめざして行うため，現代の 'learner-centered education' の流れに沿ったものであるといえることである。今回の研究の結果から，教員側のneedsと学生側のneedsが，written language中心かspoken language中心かと大きく異なっており，またESPであるべきかEGP (English for General Purposes) であるべきかについても，教員側がESPに，学生側がEGPよりに志向が寄っていることが明らかとなった。このようなneedsの違いは，シラバス作成の際に問題となるが，どちらのneedsも無視できないものであり，どのような教材で，どのような内容を教えていくべきか，どの程度までESPが教えられるべきであるかということは，今後の検討課題である。また，ESPに対してほとんど注意を向けていない学生自身の意識が，今後，看護の専門教育を積み重ねていく上で，どのような変化を生じるかについても，今後の課題である。

ESPを中心的に教授していく際には，Salager-Meyer[5]や，Hyland[6]に述べられているように，たとえば，医学雑誌の研究論文及び症例報告における 'hedge' (意見などを故意に曖昧にしたり，研究成果に対する書き手の謙遜を示したり，研究成果がすべてに応用されるわけではないという書き手の態度を表したりする手法) の用い方の重要性，及び特異性等，ESP教材の独自性に着目していくことが必要である。

また，シラバス作成の際，4技能の内の何が中心になるべきか，たとえば，垣田[7]では，ESPにおいては，話すこと，書くことよりも読むことに中心がおかれるべきだと述べてあるが，これも専門研究の補助としての英語か，EOPとしての英語かによって異なるため，本学での教育の目的及び方向性をしっかり見極めることが大切であろう。さらに，本学の場合，英語Ⅰでいわゆる "General" Englishを一通り学習したあとに，英語ⅡでESPを学習するというカリキュラムになっているが，"General" Englishと統合した形でESPを教える場合と，どちらの方がより効果的であるかも今後の検討課題である。

参考文献

1) 国立大学医療技術短期大学部看護学科協議会・看護教育検討委員会：国立大学医療技術短期大学部における看護教育カリキュラムに関する調査報告．看護教育，36：137-143，1995
2) 平山朝子：大学基準協会看護学教育研究委員会報告の紹介．看護教育，35：870-873，1994
3) 安藤昭一(編)：英語教育現代キーワード事典．増進堂，1991
4) Hutchinson, T. and Waters, A. : English for specific purposes -A learning-centred approach- Cambridge, Cambridge University Press, 1987
5) Salager-Meyer, Françoise : Hedges and textual communicative function in medical English written discourse. English for specific purposes, 13: 149-170, 1994
6) Hyland, Ken : Hedging in academic writing and EAP textbooks. English for Specific Purposes, 13: 239-256, 1994
7) 垣田直巳 (編)：英語科重要用語300の基礎知識．明治図書，1981
8) 大学英語教育学会 (JACET) 内英語教育実態調査研究会編著：21世紀に向けての英語教育－全国実態調査をふまえて－.『英語教育』別冊4，42：4，大修館書店，1993
9) 大学英語教育学会 (JACET)：大学設置基準改正に伴う外国語 (英語) 教育改善のための手引き(1)-JACETハンドブック，大学英語教育学会，1992